叛旗

共産主義者同盟

4月15日

第109号 100円

発行所/蒼 氓 社
編集人 仲代真理 発行人 川崎文人
東京都新宿区百人町1－11－31斉藤ビル内(郵便番号160) 電話 03(362)0149/振替東京・1・162856番
(宛先蒼氓社)関西蒼氓社 電話 06(312)8263

定期購読 開封1年 2,700円 密封1年 3,300円 (〒代共)

若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

6・15共産同政治集会

武蔵野公会堂 5時半

情勢は、ロッキード事件が国会空転を導き、毎日の新聞紙上の特集記事やTV報道を賑わしたと思えば、今や、「一ケタ」ガイド・ゾーン打破の交通ゼネストが二年連続の「一ケタ・ベア」に決着し、その成果や総括をめぐって、経済評論家と労働運動家(?)のにぎにぎしい登場を待ち受けているかに推移している。しかし韓国での圧政や、中国共産党指導者の一人の鄧小平解任の劇や、ソ連の武器輸出のうわさやが、事態の本質でもなく、結局の処、その水面下で激しく揺れ動く大衆状況こそ、政治と階級判断への指標なのだ。我々は、社会現象の対応策での政治行動や、変容を開始している大衆の現存的根拠を啓蒙し、実利に結合しようとは思わない。先験的政治も、倫理的政治も、究極的には、自由国家を打倒し、止揚し、家族と社会の現実関係へ着地することなく、知的大衆やジャーナリズムの自足性の獲保にとどまり、より拡散と浮遊を産む。この只中で我々は、五年余の政治経験の軌跡を、し意的な政治課題への乗り移りや、政治の社会運動への利害代行機関へ転落する愚をも排した地点で、より大衆的基層の場にたたかいの垂鉛を下し、浮上する非政治的、反政治的〈政治〉を構成したいと思う。その思想と行動のなかに、我々は、職場や家族の日常へ帰着する革命―かくめいへの大道を透視し、明日の課題に一歩一歩応えたい。

構改思潮と生活

実利主義を撃て

ロッキード事件の浮上後、局面は、政局混迷から現行政治体制の根幹を揺さぶっているかの観を呈している。だが、かといって野党の選管内閣構想や進歩的文化人連中(?)の"ポスト三木"を当込んだ「革新統一戦線」や「新しい日本を考える会」やの掛声は、一周まわってその背後には、田中金脈・人脈と同じレベルでの財界援助協力の裏打ちがあっての声高であるのだ。現実関係では、アメリカ証券取引委員会資料をめぐる米国司法省と検察当局との大仰な引渡し劇の茶番に足元をすくわれる始末である。

敗戦後の米国の対日工作や対ソ連極東戦略から、CIAと児玉、戦後保守政権との腐敗と売国と右翼の癒着を解明(?)し、してやったりと鬼の首でも取ったかの日共「特捜部」も、「一億総捜査官」を目指し、「国民大法廷」の大合唱と帰郷運動に東奔西走する社会党も、情報社会下での資料整理と大衆心理への迎合であり、またぞろ「産業報国会」運動の焼直し版なのだ。大衆的基礎でのロッキード・スキャンダルは、戦後政治への腐敗・汚職構造を糾弾し、国民審判劇へと舞台を廻すより、あるいは「灰色高官」が法的刑事責任か、政治的道義責任かは、全くどうでも良く、大衆の生活感性レヴェルでは既に底が割れているのだ。つまり、民主憲法下での戦後政治と法意識が習俗と先験的国家理念との妥協で成立っており、与野党政治の自足性を支配理念から把えても、経済社会構成の水準から見ても崩壊を開始しているだけで、大衆の側からの政治の相対化の完成へ近づいているのだ。

また、国民春闘路線をなんの自覚もなく突走っている総評指導下の諸労働戦線を見渡しても、政治帯域と社会運動との区別と連関も判らないまま、内ゲバと復古的政治への回帰を繰返えしている諸新左翼も、現行政治レヴェルでのロッキード事件の状況と構造が足下を襲っている。制度的な労働と賃金構造の足下で、流動し変容を開始している大衆の生活感性は、「一ケタ」ガイド・ゾーン打破か、ロッキード疑獄糾弾との大義名分かの論争に、生活実利(物質的、心理的)を尺度に状況をとえるのに、民同や諸党派の主張は、古典的な「正義の政治」か帝国主義国内の「自己否定の政治」かに終始し背後での経済思想、との癒着が矛盾なすべり込んでいることにあまりにも無自覚だ。これらは、戦後大衆の神話離れ、倫理政治の相対化裡での、大衆の実利主義やし意的自由の水圧に基準を見失い、戦後資本制下での自足性の解体の象徴でもある。

圧倒的な都市民衆の実利的生活感覚からすれば、内ゲバ政治は遺制だし、家族を基底に、膨化する社会編成へ如何にコミットするのかに必死になっている点で、この屈折や深度に歯芽をかけられぬ意味で、また、復古的政治は独自の宗派利害の確保を主張し続け、抗争するだけの自足性の根拠を有しているだけである。

ロッキード事件は、近代政党か国民政党か、階級政党かという論議以前に、その時代的状況下の自存構造と階級的基盤の崩壊を促し、この領域でも自由国家の幻想水準を示している。共同幻想の拡散と経済社会構成の地域性の解体・変容は米国社会下では人工的社会情報社会にしか階級問題や政治問題の対象化回路を有せず、その足下で、回収方途なき心身統括不能や家族問題を激成する日常範囲との分裂を産んでおり、中国社会での走資派批判の背後で、流動する、都市民や貧農層の家族、労働、生活をめぐる、制度と人間的総和や現存矛盾との修羅場が透視可だ。この共時的状況下では、ロッキード事件でいみじくも露呈した如く、戦後大衆の生活実利主義とし意的自由の屈折した姿に自己の政治理念を仮託し、有効性政治や機能論理を駆使した自足性の確保に至り着くか、想定する大衆像・階級像を体験的な磁場に回帰させるか、先駆的階級団結論の昇天で、自己宗教にまで心身崩壊を落着させるしかないかに視える。

明らかに時代は、現行政治の諸動向で浮上する新たな構改思潮が、共同体諸編成下が激成し、変容し、沈澱する日常コミュニケーションの諸圏内でも、「内容と形式」を変えて発動していると語ってきた。

我々の日々は、ロッキード疑獄や、職場での仲間意識や、家族、親族関係や、争議運動足下やで、人工的な社会現象と自然規定性の諸領域での、場や関係を介した理念と日常との多義的な関係づけ、準位を強いられるのに対して、トータルな基準や判断を構成せねばなるまい。社会運動や小集団や家族のレヴェルでは、勿論、我々政治主体をも透過する情況本質の課題が横たわっている。自由国家を水準的に突破し、打倒対象と止揚の回路を手に入れるには、社会に下降した国家幻想が、個々の大衆の労働や家族や他者関係から疎外した幻想帯域と、歴史的範疇としての法制度や規範や社会制度との空隙と激突と矛盾を注視することからはじまる。これらは、経済利害や擬似な経済共同体思想やがつるむ「形式的平等」観、それとも共同性の位相での個体の心身統括と関係づけの混惑へ致ることも、はたまた、党倒錯と宗派・心情利害の直接的な政治表現の固守へ導かれた内ゲバ状況からも、まったく、止揚も出口も想定されないのだ。

時代の転換と家族

社会編成の変容

党派政治の自足性の時代的解体と流動せる大衆像の変容は、当然にも、我が政治・思想・実践の全域にも通底する課題をもたらしている。

我々は、ロッキード事件に象徴化された戦後社会下の支配理念や内部秩序や、の崩壊と、その政策的、制度的対応策に手を抜いている訳ではない。我々は、諸派の如く政治の社会運動への代行化や、ヘゲモニー論や、生産管理論やへ解消もせず、かつまた、日共等の芸能政治をも拒拒した地点で、ぎりぎりの歩みを持続している。直面する課題は、この世の中で家族を持ち、子を産み、育て、死ぬという個々の大衆的ライフサイクルで、家族や生活の基層へ向う個々の思想基準を問うことや、地方で、個体が家族や労働やを介して侵入したり、疎外する遺構的な共同幻想や社会的幻想との闘いも横たえている。

政治が政治たり得るには、個々が個々にしか還元不能な個と家族が、社会的現実の多義的な発現の場で、たえず接点や媒介関係を強いられる処に集中して変質している。それ故、中央権力闘争と階級決戦論や、個と家族を基準とし社会的現実へ架橋する宗教か、実利か、習俗かの諸形態の一変種にしかなり得ず、国家の幻想の拡散に見合っての好悪の対象にまで相対化された。このことは、我々の政治の主体的構成や、個と共同性の双方の位相での共同幻想の死滅等の、この階級社会の現実の関係の構造を介して表われる〈政治〉の質を決定づけるのだ。

今日、突破口論か組織編成論か、党形成か階級形成か、綱領か戦略か、という風に論議された旧来の政治・組織・運動の連続面の内部で、実は、主体の混迷の状況を示しているとわれる。

つまり、個々の生活サイクルと射程からつむぎだす生活史の課題と、政治表現を押し出す対象的課題の射程との激突に入るぎりぎりの地点なのだ。しかも、自己幻想の内部では、市民社会レヴェルで浸透し、疎外したりする、社会的現実への個々的な選択の基準(し意性や宗教性)やが問われる処だ。これらは、旧来の知識人の「観念と実生活」、「文学と政治」レヴェルをはるかに越えでた処で表出しており、60年代後半での全共闘を経た戦後世代では、政治も、文学も、実生活も、その実、この階級社会での個と状況を切り取る基準と方位をめぐっての論争なのだ。それ故に、我々は、この戦後資本制下での観念と物質のインフレ化と、共同幻想の拡散下で、年輪を加え、自然的条件と社会的現実との格闘をも引き受けた処で、個体性と共同性との双方の課題に最も近く漸近可能な位置とは何かと問うている。

我々は、三上風な集団と個々との対立や、政治経験と生活的財貨との比較級数的な上げ底化にも、はたまた、下層、貧農人民史観による倫理的政治からの生活の転倒をも、「内容と形式」を変えた復古的政治の露出と考える。翻ってみると、政治が主体を透過し、構成し、現実社会へ着地するときの「内容と形式」は、歴史的にみても、たえず個々の家族や生活サイクルの水面下で終始する悲喜劇が、ぼう洋とした社会の壁の前で屈折した疎外の様式を示してきたのである。

我々は、これら個々の家族に基礎や源泉をもちつつも、回収不能な現実矛盾が、小共同体の自然基底(習俗、信仰の体系)や経済利害とに接合せず、関係的自立を対象としている。60年安保で戦後民主主義が終焉し、政治を政治自体で構成する民衆の揚力は、現今では法制度とテクノロジーと実利主義が、その背後での遺構的家族精神の癒着へと行き着いたかに見える。だが、我々は、それでもなお制度的日常下で政治の死滅への道筋もなく、回収の行方もない幻想表出を摑まねばならない。この家族と社会との接目に浸透する歴史的諸条件は、日本社会では大衆の幻想の表出が社会制度や国家編成やを書きかえた共同体験もなく、たえず個々の大衆の意識や生活の様式をかすめ取る形で支配階級の延命を許してきた。我々は、この敗北的現実を直視し、その根源に流動し、激成する大衆の共同的な疎外の「内容と形式」が、依然として、屈折した表現に転移していることを透視することだ。

結局の処、我々の70年代初頭で体験した政治は、個々の生活や家族の生活史や、社会という名の他者関係に累積する生活史やに還元する位相と、他方では、依然として政治自体が場を構成する共同課題への対処の再生を迫っていると思う。ロッキード事件を反戦闘争論で切り取る革マルも、朝鮮侵略前夜に結び着ける中核も、あるいは、人民の国家管理構想を担ぎ歩く4トロも、何れも社会現象のひとこまに相対化されている。時代の転換点は、実は、足下の階級社会の流動状況のなかに埋れており、個と共同性の構造的な変容に鍵があるのだ。

〈政治―生活〉思想の

自立的展開を獲得せよ

さて、この予測なき時代への突入の中で、我々は70年代初頭以来、五年余の政治・組織・運動を持続してきた。

我々は、現今の諸政治動向への批判と伴に、共時的状況下での思想的、実践的諸問題へ回答をし続けている。情勢分析と政治方針と行動提起の継ぎ合せで、今日の混迷する状況の突破はなし得ない。

例えば、政治プログラムや射程が視えないとか、戦略行動の具体的、現実的方向が定まらない故、労働争議も支援も学園闘争も、何もリアリティがないのでは?とか、また、集団論や関係論やは、社会心理学や個々の生活条件の諸範囲でしか終始しないことだし、政治運動では第一義ではないとか等々が主張されることがある。また逆に、現実社会で不可避に抱える個別的、地域的な共同性の課題があり、如何に心身を介してその関係域や場を引受けるかが、現在の中心問題なのだ等々の主張が裸形化する。諸派の政治表現の復古回帰や、一貫した(?)先験的政治の窓から情況を一刀の下に両断することに較べたら、前述の主張は、我々の主体を覆っている先端的課題でもある。

好悪の対象や利害調節できない処で、我々は幻想突破の政治の主体的構成を問題にしてきた。全人民政治闘争と拠点運動の媒介論や、先験的階級団結論による未来社会の展望やの政治問題と階級形成をめぐる諸論争は、この70年代初頭での三里塚や労働争議や学園闘争の中で徹底的に解体してきたのである。

沖縄―砂川―三里塚戦略やインフレー早大闘争以降、我々は、現在生起している内部矛盾と、それを透過する情況本質の課題とを架橋しつつ、矛盾を止揚せねばと考え、●確かに、我々の政治組織の表現の連続性の側から視れば、たえず、情勢へのタイムリーな戦略行動とそれを媒介に諸社会運動の編成を、という欲求は間違いはない。また、政治行動へ喚起する主体の日常編成の場への注目と下降が、その政治の質を決定づけるのだという反論も、根拠がある。このことは、むしろ、二律背反的にあらわれるこの現実の階級社会に眼を向けることを示唆する。

我々は、時代の転換点を直視し、全幻想の構成転換と集団や関係のかくめいへ架橋せんとするとき、政治過程に固執しているか。

これは、戦前日共から戦後革命の敗北を経て、政治革命の先行性が一度も現実性を獲得したためしがない政治思想の社会的現実への着地の仕方の敗北的歴史を背負わされていることに帰因する。また、個々の大衆の家族や労働の生活史が、社会ヴィジョンを必要とする経験抽出の連続史もないところで、この階級社会での政治革命は、知識や啓蒙の対象でしかないことへの内省なのだ。政治革命か、社会革命かの対立命題風な論争ではなくて、革命自体は、依然として、現実矛盾の実践過程での幻想の書きかえであり、究極的には、社会的現実の関係の構造へ帰結する価値基底のかきかえなのだ。

この日本社会では、大衆の立法的契機は、個々の生活史や社会の生活史での幻想表出(習俗や信仰の体系)が、たえず尖端思想を呼び込む構造で、国家思想へ屈折してきた。つまり、社会的幻想の表出は、自立的展開の裡に、個々の生活史に還元するか、共同幻想を無化する経験蓄積の体現化以外にないと思える。今日の戦後社会では、個々の家族を透過し、し意的自由や利害優先に表象される幻想表出が、制度的支配秩序や、民主憲法や、法制度やに仮託し、屈折しているのだ。根源には、社会へ下降する大衆の現在的発現や、民主意識やが、生活思想の自立化による共同体験の抽象化か、それとも、政治思想や文学やが個々の大衆の幻想表出に下降し、屈折した姿に「内容と形式」のかきかえをなすことだと考える。

また、政治が幻想を本質とするが、究極的には、個々の大衆の生活基層で憤激したり、うまく対処したり悩んだりする様々な関係の構造へ帰着する問題が残る。これらは、個と対と共同性の〈場〉が生活基層で、脈絡と連関が着けられる生活思想の土着化の問題である。これとても、日本の大衆は、小共同体編成下で家族を基点とし親族関係へ向わしめる宗教や所有や信仰の体系への集団的疎外が、まったくつるんだ〈場〉の構成をもっており、資本制社会下での尖端的な高度の資本主義の発展と、土俗的な、せいぜい親族展開の範囲で構成される個と共同性との疎外の構造が、多義的な媒介項で屈折され、つるんでいることへの反撃である。実践的には、この階級社会・資本制社会の下で、場の構成をめぐるたたかいは、個と社会の構成を経済思想でつるませる構改思潮でもなく、マイホーム志向への実利主義でもない処で、共同性も、個体性も対象化する作業の裡で、終局的な関係の構造が、法制度や職場制度によって屈折していることへの反撃を経由して、再びあたりまえの日常に還るのだ。ここでは、三上風な共同性からの解放ではなく、本当の〈共同性〉とは何か、その帯域の中での個や家族の自立への道は如何にが根底に据えられねばならない。

流動する大衆状況を〈かくめい〉の磁場へ

当世政治・思想地図と我々のコンパス

情勢は確実に転換しつつあると受感されながら、「次は何か」を時代や社会の解析からも、主体の意欲の政治構想への架橋の側からもトータルに見透しえぬ過渡に依然として我々は在る。七十年六月第二次共産同より「叛旗派」として分派して以降、我々は沖縄―砂川―三里塚攻防を頂点として、時代の尖端的課題へ目いっぱいアタックしつつ、半身は醒めて七十年決戦以降の後退戦を逆流させる政治・思想回路を模索してきた。二十代前半を主力とした、七十年当時における最も若い党派としての我々も、組織として〈政治〉に徹底して執着しながら、当然の如く政治域の変容を押し出す社会的波浪を浴び、個々が家族、生活問題に直面し、自問自答を繰り返しながら六年の歳を重ねた。時代の病は更に悪化し、依然として歴史展望への過渡に我々はある。だが、他方で漸くにして我々は、過程を過程しながら思念と世界を、日常と社会を連関させ、串刺しにする思想方法を獲得しつつある。生活と社会を経由した〈個―共同性〉構造を止揚するという我々の着眼は、先験的理念や、遺制や、生活実利や、個のロマン対象やで成り立つ現今の手垢にまみれた政治・思想・組織とは遠く隔り、非政治、反政治域から尖端的政治を露出させんとする試みである。政治対象は、急速に、共同性そのものから、共同性と個との混融時空へ変容しつつある。この接ぎ目を把え、解放し、止揚する回路に日本の、我々のかくめいの課題は集中し、知的啓発や、心情的同致のコミュニケートの失効の確認から、自立と照応の連携へ踏み出す思想と実践が問われているといってよい。

「新左翼」の復古化と我々の六年

我々は、この六年圏を自画自賛や、観賞や、回顧対象としての政治活動から把えない。逆に政治対自己、あるいは世界対、権力対自己という旧来の政治構造をつき崩し、古典的党―大衆構造を止揚する困難な歩みと自負してきた。

常識的政治―社会革命概念を、幻想の革命と関係の革命と読み替えて以降の、我々のささやかな思想と実験は、政治的、組織的に孤絶を強いられつつ持続してきた。幻想とその基底の、表現と場を介した関係の、双方を手離さず政治に執着するという我々の営為は、一方で文学的政治とレッテルを貼られ、他方で組織そのものが悪であり不要なのだと説教師を生んだ。残念なことだ。

だが、我々の指摘してきた全ゆる戦後的秩序の風化は、この期に及んでようやく、大言壮語と遺制的集団編成に支えられた新旧左翼政治の失効を宣し、他方で風化しつつあるが厳として消失せぬ秩序の残存は、ロマン対象や自己救済手段としての政治的宗教を、知的大衆のし意や趣味の位置へ押し戻しつつある。

様々な粉飾を凝らそうとも、共同性と個の実体的対置において、階級好き、党好きも、組織嫌い、思想好きも戦後秩序、構造内の強調の差に過ぎない。

戦後社会における農村の解体、都市の膨張と、それを支えた高度経済成長が、新左翼を遺制左翼へ押し返し、旧左翼を構改思潮へと押し上げ、知的大衆はその円環内で政治的無関心の自由(反面での秩序への反逆への抑圧)を保障され、かつ強いられているというのは悪い冗句だろうか?否。ここで、前者から触れてみよう。

我々を、文学的政治と批判し、あるいは無視せんとした新左翼諸派は、総評尻押しや、差別反対運動や、毛沢東派への身売りに血道をあげている間に、浦島太郎になってしまったことを知らねばならない。例えば反帝反スタ前衛志向が、一周回って被抑圧人民像のデッチ上げと思い入れ、沖縄民衆や三里塚農民への自己批判の乱発に到っている戦旗日向派の変遷を見よ。網領的規準を取り換えて、彼等が延命しえたのは、差別―被差別体験なき知的都市大衆への、無意識の差別者だという脅迫と、何よりも無害政治への大衆の無関心だということを省るがよいのだ。

新左翼と右翼が接近?なるやらせの論争を自讃した「寺子屋」等の日本グループも、「遠方から」論、ナショナリズム等への再着目の売り出しも、昨秋の天皇論ブームの舞台回しの諸君も、要するに頭が固いのだ。全ゆる共同性―共同体の幻想と秩序の拡散が、解体しつつある故の共同性へのロマン的回顧を浮遊せしめているに過ぎぬ。第一、「生長の家」上がりの鈴木邦夫が何で右翼なものか。また利権と結びつかぬ右翼なぞが戦後に居るものかね。

共同性と個を無前提的に対置し地続きで把える国家、政治、階級観は、自由国家水準以前の遺構的な代物である。梅本克己から黒田寛一へ引き継がれた戦後主体性論の延長に、反スタ派も、人民史観も、アジア派も、差別糾弾助人派も、心情的前衛美化も、つまりは主体的非主体性論(決定権は、科学的理論や、先験的党派性や、包括的階級が有する)としての帰結があるのだ。個体思想の拡張圏にも、共同性思想への吸収、埋没の内にも、個体の解放も、共同幻想圏内部での個と共同性の密通、拡充、主体代位は、自己の、あるいは社会的自己の幻想的、生活的現実の浮上から、眼からウロコが落ちるように早晩解体せしめられることは必至である。

共同性と個の幻想的密月が、知識の宿命とも、意識の自然過程とも、無縁な様子で現社会に残存するとすれば、集団や党派の外や意味付与とは逆に腐めた個々の人工的仮託に拠る他はないと思れる。

個体原理なきもやし的自由

最も、密室 的強度を 誇ってきた革共同両派閥の、絶滅戦に至るまでの内ゲバの推力は、共同性のレヴェルの非和解的対立のイデオロギー認識強度にはなく、個々の心理的憎悪や、身体的恐怖やを含めての集団編成へのはめ込まれ方の受容にあると思える。内ゲバ反対原則を揚げつつ、自らの解放派との内ゲバは正当化する四トロ的批判は、赤い靴をはいた踊子然としも骨肉戦と化した内ゲバへは歯芽もかけることは出来ない。中ソ論争を越える視座での党派性止揚水準の提示は必須であるが、それは内ゲバを押し上げている、関係的集団的な個と社会の有り様を直視し、飲み下し、経由して構成されなければならないのだ。

共同性を個と対置し、密通させる戦後政治の尖端的表現は、反差別派や、内ゲバの論理の古典的威容と併行して、構造改革的思潮として登場している。もちろん、共同性からの個の解放の国家水準的発想の尖端を占めるこの構改思潮は、戦後秩序の拡散、幻想性の剥離を、忠実に後追いしているに過ぎず、自由国家を越える原理や視座を有している訳ではない。お茶の間が世界経済の統計的構成要素と化し、都市による農村放逐、世界的大衆社会化圧力が、日共をして構改思潮へ追随せしめているのであり、道徳、教育、性、国家等をめぐるこの間の急旋回は、自主独立路線なる代物ではなく、体のよい時代思潮への同致にすぎない。

諸近代化論、既成野党の動向も大同小異であり、幻想性の拡散が経済秩序防衛の利害政治を浮上させているのだ。もちろん経済秩序への国家の下降は、差別的階級、階層構成の法的担保に過ぎず、ヴェールに隠されていた階級矛盾の浮上は必至である。

幻想空間内での、個と地続きで立ち表われる共同性のあり様に少し関わり過ぎたようだ。だが、反差別派、内ゲバの論理から、構改思潮に至る、現下の遺構的―尖端的国家思想は、結局の所、共同性の側からの官僚層の析出と、集団編成差を、その秩序内での個の有機体説からし意的自由に至る解放度を示すに過ぎない。尖端的国家思潮が、戦後のゼロシンボル社会の推転を後追いしているに過ぎぬ以上、個体の幻想的、心理的、生活的現況を引き寄せるには、国家へではなく、社会の中の個の有り様へ接近してゆかねばならない。

現代世界、社会を把える上で我々の「過渡期」把握に少し反省を加えておきたい。過渡期という概念に我々は雑多な要素を盛り込んでいた。例えば、世界史的な自由国家―市民社会編成の膨化と次は何かを誰もイメージしえぬという過渡期世界観であり、国家―社会秩序からはじかれた時代と個を連関づける原理を創出しえぬ主体の過渡期であり、全幻想、日常構成高度化し流動の急スピードを概念に押し込め得ぬという情況把握の基底たる過渡期等である。今だに我々は過渡期にあるという時、情況的過渡の圧力は更に強固である。しかし、また主体の時代への架橋の側からの過渡期という把握は、共に誤まってはいないが、双方を連関づける、つまり過渡期を止揚する方法 において冒頭で述べた形の修正が必要とされてきたのである。

国家―社会構造を、一国世界大の視座で把えんとする限り、場を介した課題は世界を引き寄せる個の経験抽出へ還元されるか、小関係域へ接木される。のっぺらぼうに把えられる国家や、社会は、それらを歴史的に累積させた尖端的な共同性(―共同体)水準から見ているのであって、その編成の分析や、原理遡及は、現スケールを超えでることはない。

逆に個の幻想域での共同性死滅イメージの追求や、共同性追求への営為も、社会へ下降し、我々を取り巻いている共同性の無視・等閑視か、構改思潮と対概念たる市民的自由の享受を突破しえぬのである。幻想空間における自己幻想と共同幻想の構造的逆立は、表現の位相で構造的に、その基底において個と社会の生活場を介して関係的に解かれる他はない。

人は幻想的にのみ共同性に関与しうるということと、諸々の家族的、職業的、社会的共同関係に囲まれてどの時代も生きるということは位相が異なるのである。共同幻想の死滅は、その排除や無視からではなく、自己幻想への回収と無化からのみ可能であり、その源は死滅することなき、言語、性、労働を介したコミュニケート、相互関係の変容から導く他ないのだ。

自己幻想と共同幻想の逆立は解決不能の命題ではない。これを固定化した上での、し意的自由や、実体的共同体―個人異和やの強調は、あのベ平連の末路に象徴されるように、構改思潮との無自覚的抱合に到るのだ。個の幻想的、心理的、生活的現況は、戦後民主感覚や、し意性の発想を、その形態においてでなく、内容において、つまりは個と社会の生活を介した関係的あり様で読むことができる。

日共の構造改革的主張は、プロレタリア独裁概念放棄や、多党性社会主義や、議会制革命コースやプロ野球残存やが、知的大衆の本音への疑問や、政治的変節への批難やに拘らず、大衆は自らへの危害を減少させるものなら好意的無関心で受容するものである。だが教師聖職論や、自治体サービス労働者論で市民的利害に迎合しつつも、市民道徳の提唱や、ポルノ批判、同棲、婚前交渉禁止やの主張は教育ママや、職場サークルに支持反応が出た位で、圧倒的戦後大衆には、学生民青同盟も含めて総スカンを食っていると思われる。

七十年以降、我々は一定の組織メンバー、政治集会、理論誌、パンフ類への圧倒的支持という構成を持ってきた。新左翼では、最大派中核の頭打ち、革マルの姑息な延命、解放の凋落、4トロの火事場泥棒的大衆迎合、線香花火的マル青同、ブンド諸派の四分五裂、大衆闘争支持勢力への溶解、[illegible]会の浮上、創価学会のサークル召還、民青の伸び悩み、ノンセクトの拡散、ベ平連の解体等が指摘できる。

だが、はっきりしておかねばならない。全共闘運動や、七十年決戦は山本義隆の学者への舞い戻りや秋田明大の映画出演に象徴される如く、飲み屋のスーベニールの対象と化し、大衆闘争は局所化し政治運動や党派そのものは個々の趣味の範囲へ相対化されているといってよい。文化的には、戦後世代を、フォークや、劇画や映像表現や、ファッションや、CMやリバイバルブームで測れるかに見える。しかし、理念にも、書きことばにも、宗派にも、他者にも持続的な関心を有せぬ戦後世代多数の個としての生活意識や感性は、文化受容からではなく、家族や社会における共同性と関係意識のねじれから解かれねばならないと考える。

家族と社会の接線から大衆像を

本稿では、共同性への帰依、し意的自由の流通の破産の確認から世界と大衆像の引き寄せを個―共同性の時空混融場を、生活を介した個(―家族)と社会の接ぎ目の解明から為さんと考えた。これは通常の、意識の自然過程たる対象遠隔化、拡大を価値過程と錯覚した、レーニン的政治理念、啓発的組織観の無効性、他方での全共闘運動が白日の下に解体を宣した、個の対象化や追体験による知的自足性の結末の、双方の峻拒から構想されてきた。

個と共同性の幻想的対置の枠組の中で、反差別派も、内ゲバ絶対戦争論も党派的思想の普遍化への強弁であり、構改思潮や小市民意識、し意的自由の拡張論は戦後大衆感性の、全共闘的自己否定論は学生層の部分的発現に過ぎない。

個体思想は細い回路を通って世界を引き寄せんとするが、共同性思想は圧倒的多数大衆の生活意識、感性の所在との距離で自らの水準を画る他ないと思われる。国家思想から、その裏目に貼りついたナショナリズムを計測するという、日本の国家と大衆の構成判断は、戦後社会下で失効している。では構改思潮から、また遺構的政治理念から、大衆像を引き寄せ得るか、否である。

構改思潮を最上位とする自由国家は、当然にも諸々の遺構的観念を包摂し、併存を許容することで有機的構成水準を有し、他方で社会へ下降し、経済利害を防衛する。ここでは、ひと握りの観念的諸宗派を例外としつつ、差別的社会の、多義的私的階級、階層を分散的に露呈するに過ぎない。

国家思想や、それへの批判者たる諸共同的幻想から大衆像を導き得ず、一市民、一知的大衆としての自己了解が国家思想と相補的な民主感覚の吐露をしかもたらさぬ時、家族の中の個と、社会の中の個を連関づける途は、大衆像へ届きうるか。どのような内容でか。

政治、社会ヴィジョンを押し出す、大衆像を家族と社会の接ぎ目から解明しうる根拠は明瞭である。我々は理論的に、最も包括的な階級概念を、市民社会から私的経済的階級として疎外され、更に国家から公的政治的階級として疎外され、この両者から既成の全ゆる階級を止揚する階級の輔郭を導いてきた。この視座に、自由国家の有機的構成の高度化と、社会、諸集団への下降という現況判断をプラスし、国家―社会を立体的かつ厚みのある共同性―共同体のあり様から見る時、最大多数(階級)の大衆像としてのモデルは家族と社会の切り口で引き寄せ可能なのである。

では、階級概念と大衆概念はどう連関するか。常識的階級観は十年一日の如く硬直した「マルクス主義」主義に毒されているから、市民社会における経済的階級と、国家に対しての政治的階級の別種の階級を連関づけえず、それ故に媒介者としての党を至上化するにいたる。また、常識的大衆概念はその基軸を天皇制、民主憲法、高度成長下の消費主体と変容させながら、誰にとっても現状肯定のキイ足りうる無限定的―多義的な代物である。階級と大衆の肉ばなれも、各々が思い入れか、自己判断でしか像を喚起せぬ由縁は、結局の所は、人々がプロレタリアや、被支配者という規定を、社会や国家から受けつつも、プロレタリアートや、被抑圧者として受感し、自己形成を遂げるという体験を有して居ぬからである。天皇の赤子としての臣民大衆という幻想的、ナショナリズムの戦後拡散以降十年遅れて「共同体論の現在」を語っている松本健一等の知的大衆の焦燥に拘らず全民衆的、国民的、階級的、帯なぞは、幻想的にも存しないのだ。

かくめいの推力たる民衆の共同的な、相互関係、了解、扶助等の思想と行動の経験の不在化を嘆いても仕方がない。我々は道徳や社会常識や教育や性観念の拡散に、不思議や自民党と共産党が口裏を合わせたかのように秩序再生を願望するという立論の愚を排し、個と共同性の幻想的逆立が着地し、混融し、火を噴いている家族と社会の有り様、その接合の仕方から全ゆる秩序の解体と、大衆的共生感、共同関係の創出を凝視せんとするのだ。

幻想の、表現の革命は世界性へ駆られるが、それを押し出している場を介した関係のかくめいは家族と家族が切り取る範囲での社会に局所化しているのだ。表現論と集団論との二重のスケールで世界や大衆像を引き寄せ、政治構想へ架橋するという試行は、未だ正しいとはいえぬかもしれぬが、少なくとも我々の受感や経験抽出に照応させてみて誤まっていないと考える。

我々は自分らのモチーフに拮抗するに足る文学を、歌をもっていない。ただわずかに、自立して闘かわれているいくつかの争議団や、し意的自由に昇天せず家族や社会関係に着目してきた全共闘世代の諸グループに思想的照応を感受する。だが我々は、多数大衆の関係的葛藤に近く、他方で、交通を拒絶するかの表現の細かい通路を歩んでいる心算である。

光文社闘争と直面する貧困の深さ

職〈場〉と関係意識の屈折点は

――畦　倉　恭

「出ていけ」合唱を考える

光文社三労組員が講談社構内の争議行為で〈逮捕〉されたのはこの四月五日のことであった。講談社の構内、構外での争議行為は七四年秋以降からおこなわれてきたが、この過程で大塚警察が三労組員を〈逮捕〉したのは実ははじめてのことである。無論、彼はわずか五日間の不当拘留の後、準抗告に基き釈放を克ちとった。だが、彼が何故今になって〈逮捕〉されたのか、二年近くも手をこまねいた警察官が何故に今になって〈逮捕〉行為に踏み切りえたのかという点からこの稿に入ってみよう。

「弾圧を狙っていた。計画的な逮捕だ」という見方は半分当っており、半分は誤まっている。たしかに六年余の労働争議を闘い抜き有名になってしまった光文社闘争を苦々しく思いそれゆえにこそ潰してやりたい、とか三労組の野郎をしめあげたい、とかの衝動や思惑を公安警察がその使命感からも持ちつづけているのは当然のことだ。だが幸か不幸かニッポン型公安警察の〈強きを助け、弱きをクジく〉精神構造は彼らの希望的観測に沿う状況次第でしか発揮しえない側面を色濃く持っている。

では彼らにとって光文社闘争はその点でどうだったのかといえば決っして喜ばしいものではなかったといえる。それは光文社闘争がつくり出してきたひとつひとつの闘争現場は彼らの「スキあらば介入」の衝動に希望をあたえるような状況をことごとく封殺してきたからである。結局御用組合員のデッチあげ告訴という「協力」によってしか〈刑事事件〉の現場を構成しえなかったのである。

だが四月六日、彼らの望む状況は幻のように現われたのだ。少なくとも逮捕行為に及んだ警官にはそう思える小状況が現出したのだ。

その日、三労組員はわずかの人員ながらも争議の当事者に他ならぬ講談社経営への抗議行動として構内に座りこんだ。わずかの人数…とみるやまずガードマンが暴力的に排除を試み、これをふり切ってなお座りこみを続けようとする三労組員の眼に映ったものは何か。これもまた〈少人数〉とみてのことだろうガードマンの背後に何時もより多く集まりつつある講談社の職制、そして腕章をつけあきらかに組合員であることを標示した約六十名程度の人々であった。現象的には何をするわけでもなく、しかし用ありげにガードマンの後方で何かに備えるかのように居る姿は、三労組の構内座りこみ行動にはつきものの風景にすぎない。が、いつもより人数の少ない三労組員にふたたびガードマンが襲いかかるや、その後方から三労組員を押す、蹴る、挙句の果てには排除の指揮をとる庶務課長の「三労組は出ていけ！講談社から出ていけェ！」とのマイクに大声で唱和するに至ったのである。この対応は（予測しないではなかったが）光文社三労組にとってあずかり知らぬ出来事であった。警官が労働争議に介入し争議メンバーを逮捕しうる契機が現場でもたらされるとすれば、これは願ってもない出来事であったろう。

たしかに驚いた講談社労組執行部は「労組どおしのトラブルを避ける」立場から、なかに割って入った。だが腕章をまいたれっきとした組合員が何故にかくの如き行為に及んだのかを内部意識の側から明らかにできなければ警察の労働争議介入を自らの職場内で黙認するも同じである。

徹底的にあばき出されねばならないのは「光文社三労組は出ていけ！講談社から出ていけ！」なるヒステリーじみた発語の由来であり、その言いぶんである。官憲が労働争議に介入し逮捕から起訴にもちこむにはある〈協力〉と〈大義名分〉が要る。このトリックと名分とりの仮象が現実の労働者の意識の象徴的なあらわれかたに支えられているのだとすれば、その意識構造はいくら明らかにしても充分すぎることはないのだ。

「労働者同志のトラブル」について考える

講談社経営が光文社〈争議〉の一方の当事者にほかならぬーことは光文社闘争への敵対行動にはしった〈労働者〉にとってもいちおうの認識である。

それは光文社闘争の一形態として講談社包囲闘争が開始されて以降の①ガードマン導入ー常駐だけで対応しようとした弱腰姿勢　②定例部課長会議席上での形式的な「争議に講談社は関係ない」との事実も論理も皆無の大声だけが目につく対応過程　③にもかかわらず三労組の重役追求行動には業者の営業用トラック荷台に隠れての構内逃げこみ、それがダメなら社外会議を指示する対応ぶり　④三労組員の入構阻止と称して従業員の不自由もかえりみない正門閉鎖……といった一連の消極的対応のプロセス。講談社経営者が争議はじまって以降いかに介入し続けてきたのかへの調査にもとづいた三労組側の徹底的なパクロ戦術、その内容に跡追い的にシブシブ同意・追認をおこなう光文社ー講談社経営……。「株主として責任をとれ」という三労組の追求にその「話し合い」の場づくりを〈光文社株主総会〉ではなく〈講談社役員総会の決定〉で認め、〈講談社臨時部課長会議〉招集の席上で「……そういうわけで何かあったら諸君、よろしく」と木に竹を接ぐような影妙な弁明、態度……。他方では講談社旧副社長の光文社社長への就任ーー等々……。光文社闘争を支持する、しないにかかわらずこれらの総過程、闘争が結果させた事態は、講談社資本傘下労働者に「講談社経営は光文社〈争議〉の一方の当事者にほかならぬ」認識をもたらさずにはいなかったのだ。

だがそれでも「関係ない、別会社だ、出てゆけ」という講談社資本傘下労働者が存在するのは何故か。

認識と行為は一致するなどというバカな楽観がこの世に成立せぬ限り、彼らの意識内部の空隙というか構造の準位へ眼を向けることが必須だ。つまり実感や感情の起伏のかたちであらわれるものと、体験をどうみていくのかという理論体系への欲求とがクロスして生ずる意識の構造といっていい。

ふたつのタイプを私たちは眼のあたりにしてきた。ひとつは「三労組の包囲闘争の理由はわかる。だが（講談社社員としての）私の仕事の邪魔はしないでくれ」という位相がそのひとつであり、もうひとつは「別会社じゃないか、スジが違う。講談社にかまうな」というやつである。無理やり分類すれば前者は〈し意〉的自由のはきちがえであり、後者は共同性領域での幻想的共同性への同致であるといえるかもしれないが、私たちのかんがえでは前者と後者は分類不可能なメビウスの帯のように表裏一体であるとかんがえる。分類が必要なのではなく前者と後者の〈つなぎめ〉の位相に眼を向けることだ。そこでは、（企業帰属意識と呼んでも、小共同体編成に価値をみるかんがえかたと呼んでもいいが、）共同体とみたてたものに関係の意識が上げ底されハメコまれているという指摘は思想のひとつの結果の断罪にすぎない。重要なのは、それを相対化していく過程を労働者運動としてどう組織しているのかへの考察だ。

〈し意的自由〉も、〈共同性〉も自らを測る準位・鎖は自らの運動の容量のうちにしかない。ここで明析になれないとき、状況の変化に付随する感情的対応として実感信仰が一方の極を支配し、その裏返しとして盲目的な理論信仰が他方の極に生まれることは私たちの経験でも明らかである。そして理論を求める方位は、自らの運動のうちに自らの尺度をもたぬ場合じぶんたちの相互的関係を超えて共同体に遡く幻想の共同性の歴史的帰結たる支配理論へ、さらにより累積的に巨大なそれへ自らを〈上昇〉させようとする欲求が〈威力〉や〈権威〉としてそれへ自らを感染させるのだ。共同幻想の歴史的諸型態としての宗教的団結やし意的「自由」主議を、〈威力〉や〈権威〉として、相互的でしかありえぬ関係の意識の底辺へ密輸入する悲喜劇が繰返されるのはこの箇所ではないかと思われるのだ。

集団的表現や集団内コミュニケーションの準位ではこの箇所が担保ちえなければ結局のところ、単組内サークルは単組に、単組は労組に、労組は労組連合に、そして最後は国民政党（ないしは政治集団）に判断の系列がまかりとおる。

理論的位相では結局のところ、企業や職場概念を経済的共同体概念にスリ替えた〈株式会社〉制度・〈別会社〉論、つまり労務管理の最上位観念に自己同致した運動論や「要求」がハバを利かせる事態に至りつく。それ故講談社労働者（に限らないけれど）の「気持はわかるけれど迷惑」論も「関係ない、出てゆけ」論もかれの共同性ーし意性〉の感覚の内では同居している、としか言いようがない。がこの奇妙な同居する意識は当の講談社労働者じしんがいちばん肌身に感じているとも思われる。自警団をつくるにもつくれずはたまた阻止もできない事態にそれは象徴されている。

ではこのちぐはぐな意識形態の底部に流れる共通の意識は何んだろうか。私見ではごくありふれた村八分への恐怖の感覚であるように思われる。私的生活利害の意識はそこにストレートに結びつかないだろう。戦後の価値意識、すなわちし意的「自由」感覚が村八分への恐怖という伝統的な共同意識を突きぬけるほどには透徹も、成長もしていないからだ。

講談社における労働者運動の未開性、後進性は共同の禁制と黙契とがほとんど区別できぬ事態に支えられている。つまり労働者が（労組員が）じぶん自身に明瞭になりえていないというあらわれかたに規定されているのだが、〈明瞭になりえていない〉のは共同幻想・対幻想・自己幻想の区分にたいしてである。その意識の底部では同一資本のもとで働く他者との相互的関係を共同性の準位を浸触する何物かに対して明瞭になりえていないということを意味している。そして〈村八分〉への恐怖意識が何処から、どうやってきているのか明瞭になれていないその程度に見合って自然に生ずる実感と理論への信仰の契機は、分裂せずに存在していると考えられる。

こうして存在し続ける村八分への恐怖を〈共同性〉や〈し意性〉に自らのうちから対象的になってゆくという意味での運動位相では戦後の労働者運動、現在、眼のあたりにしている労働組合運動はほとんど成熟しえていないことは何度でも押えておかねばならない。現実の労働者運動での〈し意と共同性〉の接ぎ目においては「私の意見を尊重してほしい。君の意見も尊重する」ことはほとんど戦後民主主議の枠での相互性でしかありえず、（法的位相の自己疎外）としての〈しくみ〉は皆無に等しい水準にあること（あってもそれは商取引き・政治取引き的なバランス感覚に近いものだ）の後進性未開性に直面している事態として把握すべきではないか。

この現実のいかなる高尚な啓蒙でも説得でもゲバルトでも陰謀政治でも流動化の契機はもたらされない。がしかし方途はあるのだ。光文社闘争が苦闘のうちより示しているように、「別会社だ。出ていけ」大合唱や、「気持はわかるが迷惑」なるジャパニーズスマイル的対応の裏面にハリついた〈行為への論理づけ〉がどれほど貧困な観念体系にわが身を寄せているのかを、ほんとうは自分自身にたいして明瞭になれていない意識の現在を何度でもイヤというほどじぶん自身で視ていただくように戦術を探ることからはじめることだ。

認識が認識として生きるにはそういう過程的〈とっつき〉を必然なものにする。そして光文社闘争が六年の経験蓄積から「講談社資本傘下労働者との連帯」、「第二組合解体へ！」を掲げ、現実化せんとする限り、この箇所へのさらなる激突と踏み込みは未踏の困難さを伴うとしても運動的命運からは不可避である。

「解雇撤回実現の方向」とは何のことか

光文社三労組員が講談社構内行動で逮捕され、すぐさま準抗告での釈放を克ちとった直後の四月十四日ー光文社経営は団体交渉の席上、次のような発言をするに至った。「会社側としては懲戒解雇者、記者労組（全員）、臨労組（全員）の解雇撤回を実現の方向で検討していきたい……云々」という主旨だ。現象面からみればこれまでの「解雇の撤回しない、首がほしい」主張から転換しだかにみえるだろう。

この現象をどう把握するか。「エサだ、アメだ」と規定する見解はこれまでの経営側の争議対策理念の枠での部分的指摘にすぎぬ。押えるべきは①光文社闘争のゆるぎない展開過程からみれば〈いつの日にか〉このような言いかたをせねばならない経営労務的見地からの不可避的な状況判断に追い込まれた、ということ②それ以上のものであるか以下であるかは〈実現の方向〉の喧伝ではなく内容提示以外ではないこと③少なくとも内容は何も提示されていない現在であることーの三点でいいだろう。だがいま少し踏みこむべき点は、このような言いかたをした彼らの状況判断の基底だ。それはむこうとこちらを結ぶ光文社闘争の一形態たる講談社包囲闘争、構内行動がどういう状況をもたらしているのかへの客観的判断である。

私見では前述した包囲闘争↓構内闘争の展開過程は少なくとも三労組を構内から排除する大義名分〈論理〉をいままでどおりの「別会社」論の形式的主張で仮装すること、転換なき実質なき形式的「話し合い」で粉飾することはもはや不可能であるとの判断へ追いやったものと思われる。それゆえ、まず排除の論理を覆せる側・講談社ー光文社経営じしんがいままでとは異る論理での「別会社」論を自らの内部で納得したい衝動に駆られているのだといえる。ここから現象するものは例をとれば、実感信仰の基底にある〈わずらわしいものは早く眼のまえから消えてほしい〉感情の流れを集約するための〈状況論理〉を仮装することだ。……会社側は解決の姿勢を示して団交にも応じている、そういう状況にもかかわらず（闘争をやめずに）講談社構内へ入ってくる。こういう連中は話してもダメだ。実力排除しかない……。

この鼻薬的なまやかしが現実の労働者の大多数にはよく効く、と彼らは経験的に判断しているだろう。内容がなくても相手がかくかくしかじかの方向だといえばあたかも全てが示されているように思いたがる者も少なくないのだ。とくに出版労連の官僚のように、相互的コミュニケーションから法的に自己疎外することでようやく〈中央執行委員〉になりえている自分にさえ気がつかないようなトンマな連中に、光文社や講談社経営が数多くを期待しているとしてもムリはない。それゆえ光文社闘争にとって資本の側ばかりかこの無自覚でトンマな連中のもたらす質の悪い障害を徹底的に受けとめはね返してゆく闘いはこれまで以上にシビアに問われることになる。

光文社闘争の支援勢力にとっていまもっとも問われていることがあるとすれば、会社側の新たな〈排除の論理〉を思想的に突破すること以外ではない。結局は講談社構内からの排除に合理性をもたせるものとして事態が収斂されようとするとき、包囲闘争ー構内行動の質量ふくめた更に強力な展開が断固として要求されるのは前提的なことだから。そのとき講談社労働者でもなく当該でもない支援者は他者とは異る回路によって思想的闘いを構成する必然性が全面化するであろう。そこでは講談社労働者の象徴的な意識・行為との拮抗の水準こそが問われるのだ。

当該者にとってはただひとつ、〈解雇撤回実現の方向が会社側〉と自分たちのそれとどう異るのかを明瞭にしてゆく過程とともに、七年余の闘争によって本質的に対象化せねばならぬ課題と自覚してしまったものと、制度的な解雇撤回のはざかいに（想定されうる）ふたたび形成される矛盾を思想的に再構成する軸心であり、そこを正念場とするたたかいの一切である。

弘済会闘争報告

闘いの転換局面をどのように押えるか

神田誠

「妥協案」を拒絶し闘いを継続する

この間新聞紙上に報告して来た様に、弘済会闘争は、豊島区民センターにおけるエレベーター自動化ー無人化として出されてきた豊島区からの下請労働者の職場切捨て攻撃に対して展開されてきました。この、生活確保＝職場確保の闘いとして、昨年10月来闘われてきた内容は、今年二月段階での豊島区ー弘済会理事会から出されてきた「妥協案」によって、ひとつの転換を迎えました。

この「妥協案」なるものは、①エレベーターは自動化ー無人化するが、受付は残す。（旧来はエレベーターと受付の交代制勤務であり、当初は両方共下請契約を破棄すると言っていた）②現有5名はひとりも解雇しない。その内のアルバイト一名は、4月1日付で正職員とする。（現在、理事会はこの確認書の約束 を無視している が）という内容でした。

私達はこれらの「妥協案」によって、雇用関係や給与が確保されるのは一定の評価たりえても依然として、私達に無関係のところで私達の労働の態様が決定される事に対する攻撃を、闘いとして展開せねばならないという観点から、この「妥協案」を拒絶し、あくまでエレベーター自動化阻止の闘いを維持することにしました。

3月段階での闘いは、組合員動員の減少、東水労の支援の事実上の脱落、という困難な状況の中で闘われましたが、3／10・11、3／31、4／1の職場占拠ー実力団交の貫徹という闘いの中でも依然として、豊島区側の硬い態度は変わらず、再び私達はひとつの転機を迎えざるを得ませんでした。それは、エレベーター自動化阻止から、受付での5名の確保への方針転換として結果しました。もちろん闘いのこの様な一定の終息ー方針転換はごくあ たり前の事 ですが、ここでの問題は2月過程での「妥協案」拒否ー闘争継続という判断と、4月段階での方針転換という判断の落差の中で、そこで問われた課題をどの様に再構成し、今後の闘いに累積させることができるのか、という点にあります。

エレベーター当該労働者の心的過程へ切り込む

私達が2月段階で「妥協案」を拒絶し闘いを継続する、という判断を下した内部にはいくつかの要

もちろん支援会議として一定組織的にこの様な闘いに関与する事の内部には、政治集団が社会的思想的根拠の規定の問題と、支援会議として持続する事の集団内部の問題等々の鮮明化が不可欠である事は当然です。ただこれらの問題に関しては後日別の報告が何らかの形で成される予定なので、ここではむしろ当該労組の一員として運動自体の内部で何が問題にされているのか、されなければならないのかを明らかにしていきたいと思います。

因が指摘できます。これは大枠として考えれば、ふたつの思いがありました。ひとつには、私達の組合運動が前提的に負わされている外的条件に対応する問題であり、ふたつめには、エレベーター当該労働者の心的過程を組合運動の内部に還流させねば、という問題意識であっただろうと思います。

ひとつめの問題から見た時に、私達に＜壁＞として映るのはまず契約問題です。ビル管理業務という企業の性格から、その収入のほとんどは委託契約料であり（弘済会の場合は都ー区関係）、支出のほとんどは人件費である訳です。だから、私達の賃金闘争も労働条件の改善も全てあるところで、契約金額と契約内容に規定されるところが当然にもある訳です。その為に、どう考えても賃闘や改善闘争の延長上に、都や区に対する闘いを設定せねば、というのは自然な発想であり、又、それをやらなければ、私達の闘いの具体的成果も頭打ちになる訳です。この様な闘いの過程で常に具体的問題となるのは、契約当事者は理事会であり、弘済会の労組と都ー区とが話しをするのは筋違いである、という彼等の形式論理でした。そして私達は、この様 な論理に 対しては、実力で交渉をかちとるしかないし、今回の問題（エレベーター自動化）では特に、その様な闘いが要請されているし、この闘いを媒介に、各現場の労働者に対する契約をタテにしたしめつけに対して対抗せねばならない、という事が私達の内部に当然の様にありました。

しかし、闘いの根拠をより重く形成したものは、この様な外的条件よりもむしろ、エレベーター当該労働者の心的構造であり、その事に対する私達の判断でありました。

当該労働者の闘う根拠の困難さへの注視を

労組運動が、もしくは労ー使関係の内部で扱われる労働者の＜生活＞の問題は、給与水準、給与体系等に表象 されるも のとしての＜賃金＞の問題、労働時間、強度等々に表象される＜制度＞の問題等々としてある。ここでは現存の労働過程が、個の自己史や職場以外で営なまれる関係的世界とは、一定分離されて構成されている分だけ、個の＜生活＞の像は、ある抽象と限定を余 儀なく されている。

人が市民社会では職業人としてある以外にない、という構造は、幻想の構造の問題としても、労働過程を巡る構 造としても 言い得る。だから、家族を生活の第一義とするというのは、個のし意的な価値感一般の問題ではなく、まさに現存の労働過程に関与せざるを得ない大衆の不可避な日常統括への希求の発現でもある。

組合運動が、もしくは組合という制度が、根源的なところで吸引力を持たなくなってきている、という情況は、個が自己の労働過程を対象化せんとする時、現存の労働過程が自己史や生活を分離・限定してあるからこそ逆に、その対象化の視座は、労働過程そのものの内部というよりもむしろ、時代の側での幻想の水準と、個の持っている幻想に規定されながら拡散する、といったところにその根拠を求める 事ができる。つ まり、＜生活＞の像のし意性に規定されながら、自己の労働過程の対象化も又、し意的にしかなされない、という事だ。

そして又、現存の労働過程がその抽象性を高次化すればするほど＜生活＞を疎外し、逆に個がその日常を統括する事がますます困難になる。という構造がおそらく成立している。

組合運動は、労働過程に端を発しながら、個々の＜生活＞の像のある共通項を想定する闘いであるから、個々人のこの様なし意的な対象化と日常統括の困難性が、組合運動の現在の＜危機＞を現出させている。

だから、戦後の労組運動が、合理化とひきかえた賃金を獲得してきたという、そこでの生産力思想や組合理念として表現される理念を批判する事はおそらく、その様な表現された理念のみを対象とするのではなくて、いわば合理化という、労働過程の抽象性の高次化そのものが、ま すます 個の＜生活＞の現存性を疎外する分だけ、個にとっては労働過程そのものがますます感性的には遠くなる、という様な大衆の＜生活＞の像と、そこでの感性ー理念こそが批判と止揚の対象にせねばならないという事だ。

そして個の＜生活＞の総体像が浮上しうるのは、職場内関係や組合運動の過程でとりわけ身体的行為を、共同的な世界の内部でなさんとする時である。しかしながらこの時の個の生活の現存性の表出は、何かを媒介にせねば当然にも共同の課題たりえない。そして共同の課題たらしめる流通する理念や概念は、それが媒介せねばならない時代の水準とあるズレを持たされており、依然として組合規範や、階級意識や、生活危機の啓蒙一般としてしか存在していない。

だから二月段階以降、エレベーター当該労働者が、自らの闘う根拠を表現せんとする時、故なき事で自己の職場を失う事に対しての異和感を表現せんとする時、合理化攻撃の防波堤とか、無人エレベーターの安全論争へ、又、明日は我身であるとの警告へ傾斜しやすいのはむしろ当然であり、私達はこの様な表現を一般的に批判する事は何の役にもたたない。私達は自己の表出を、表現へ転化する時のこの様なズレの構造をまず見てとらねばならない。

旧来的＜生活＞を超える契機を運動や組織の内部へ累積させたい

私達は今回の闘いの中で、いわば旧来的な流通する＜生活＞の像の限定性を超える契機を、運動や組織の中に累積させたい、その為の踏み込みをなすべきである、という感覚を持ってきたし、この事がニュアンスや表現の差はあれ、闘いの根拠として想定する事は可能である。しかしこの同じ課題の前に私達の闘いは一定の頓座を強いられたというべきである。

当然の事の 様に旧来流 通し問題とされて来た金銭や、労働条件等々の事 実的な＜労 働＞と＜生活＞の像から逸脱する個の現存感は、旧来の集団編成の軸と、そこでの理 念の再構成を不 可避とする。もちろん旧来的な組合という範ちゅうでの組織ー理念においても、現存の労働過程を巡る諸制度や理念と一定乖離している訳だがしかしそこではなおかつ、ある共同的な＜生活＞の像を、例え限定的にせよ想定可能である、という時代の幻想の水準に規定されていたはずである。

そして組合運動の範ちゅうからの逸脱を、行政問題や制度的な国家へスライドさせてきたのが、旧来の組合的政治ー政治的組合の円環であるとすれば、依然としてここでは、その様な思想の構成が問題であると言いうる。そしてその様な思想の構成はおそらく、組合運動の対極に政治的帯域を想定する事やそこでの架橋の問題というよりもむしろ、全ゆる旧来的な共同の観念から逸脱していく、大衆のし意性の発露の問題を、しかしながらそれらの発露が、情況の反映であっても、情況に対するコミットの問題には、つまり自己の日常統括への契機には直接的には決してなりえない、という事への透視が、ひとつの実践的な思想の問題として想定されている。つまり＜場＞の思想の構成の問題であると想定しうる。

私達が四月段階に入って、その様な現存的感性と表出に対して、表現を与える事ができずに、敗退（この位相での）を余儀なくされた事は、私達の持っている組合運動の累積や、外的諸条件（区ー理事会、支援関係等）に、一定規定されている事は、その表現への転化の具体的諸条件を考えた時に、当然にも不可欠の要素である訳だが、私達はただその様な外的条件が成熟するのも待っている訳にもいかない。

そして、組合運動の範ちゅうから逸脱していく個の現存的な感性や、そこでの＜生活＞の像は不可避にある思想を産出するが、それらの思想が力を持つためにはまずそこへの入り方と出方をはっきりさせねばならない。

個の現存的な感性や思想は共同の課題たりえるためには媒介を必要とする

思想の＜場＞における構成は、その内部に常に＜場＞を構成している条件から出発し、そこに帰っていく回路を 想定せね ばならない。確かに社会的諸運動の内部で構成される理念は、そこで自足的に円環するものではないし、そこから逸脱していくのは、思想の自律的運動と言っても良いが、そこでの構造は自覚的に押えておかねばならない。

旧来の、もしくは日常的な組合運動の範ちゅう から逸 脱していく個の現存的な感性や思想は（沈黙という表出も含めて）ある媒介なしには共同の課題たりえない事は前にも述べた。そしてその媒介は、逸脱していく表出を表現に転化する事のできる思想の問題であることも述べた。ここで、思想が、現実的ー具体的な条件ではなく、思想がその媒介たりうるのは、その＜場＞の内部を対象化するものでなければならない。

4月段階で、エレベーター当該労働者の、現存的な感性や感覚に対して、表現を構成する事ができなかったのは、外的な条件だけの問題ではなく、すぐれて、私達の内部における日常を、組合の内部で、職場の内部で構成される共同的な倫理や理念と相反する様な表出に対して、何を基準に、何を指示性として再構成するのか、という課題を、共同的に扱う事に良く勝利しえていない、私達の組合運動の累積に負うところが大きい。

確かにこの事 は情況の問 題として、私達にとっては与件としてある、幻想の累積や水準に規定されている訳だが、その事を指摘する事と、私達の内部で、基準や条件を創出する事の間には大きな落差がある。私達にとっては常に実践形の、私達の側からの問題として立てる以外にはない。

闘いの内省から配転阻止の更なる闘いへ

3月31日、4月1日の闘いを終えた段階での、私達の闘いは、エレベーターの自動化阻止から、現有五名の受付作業員としての確保（配転阻止）に重点が移っています。

4月13日の団交において私達はこの間の合理化攻撃の結果として出されてきている問題に対して①昼間アル バイト（1名）労 働者を、4月1日付で正職員にするという確認書の早期実施 ②配転策動の撤回 ③夜間アルバイト（3名）に対する解雇予告手当の支払い、を求めて交渉 を行い ました が、理事会は私達のこれらの正当な要求に対して、全て拒否の回答をしてきました。

私達は最低限5名の関係と身分を保証させるものとしてのこれらの闘いをあくまで貫徹する必要があります。確かにこの様な（配転阻止の様な）闘いはこれまでの闘いにおける経験累積の延長上で可能な闘いである事ははっきりしています。

しかしこの様な闘いの内部においても依然として、エレベーター自動化阻止闘争の中において浮上してきた問題を孕んでいます。例えば、5名の内部での組合員ー非組合員といった構成、他現場組合員との関係等々、私達がある規準を持って判断せねばならない事はそのままひきずっている訳です。

私達はこれらの問題を今後の闘いの中で、春闘も含めて既に闘いはひきつがれ、新たに展開されている訳であって、具体的にはともかく、内容の問題、過程の問題として、私達の生活の像と、大衆の像と、思想の構成の問題としても注目していきたいと思います。

深層海流

☆ロッキード・スキャンダルと春闘論議の真只中に飛びこんだのは、フランスの学生運動の再開と中国情勢の変動であった。それら双方における総体の構造の解明も、詳しい事態の掌握も現在の我々の手持ちの資料では不足している。しかし、春闘論議と連関させた位相で見た時、経済過程にまつわる政治論議についつい我々の目は引き寄せられる。

☆ヨーロッパ情勢は、政治・経済的な流動局面を体現しながらも先端的な位相で登場しているのが、資本主義制度化での分配形式を、社会契約、いいかえれば経済共同体理念として再編していこうというものである。経済共同体の中では、労働者も資本家も社会契約を通して同等権利を有するというものである。もう一つは、所有の共同化の下での分配形式の中心課題が、人間と人間の関係の矛盾に突きあたっているとする中国の問題である。しかし、この異差は、アジアやヨーロッパの範型に絞りあげていくという指向性では問題にならないと思われる。一体経済共同体とは何を指すのか。人間と人間の関係とは何を指すのを、どの様な＜場＞や関係や理念を示しているのかが現実関係として把握されることが必須であると思われる。

☆現在、我々はこれらの課題が日本の社会のいたる処で混在して現われている様を直視している。また我々の社会は、ヨーロッパや中国の様に、政治・社会問題として共同体や集団内部での人間と人間の関係や共同体・集団理念の問題が現われるのではなくて、大衆の生活過程が、脈落なく、混在してこれらの課題を飲みこみ、国家や社会に向わずに際限なく膨張している情況の裡にある、と考えている。このような生活過程の膨張に、知識も政治も無力であるとしかいいようがない。

☆ヨーロッパでは現在「文化」や「自然」が「社会」という怪物に突きあたっている様に思われる。中国では「社会」編成が「文化」や「自然」の壁にぶちあたっている様に思われる。ヨーロッパ左翼のプロ独放棄はヨーロッパでの「社会主義」の不可能性の表象であるのか。中国でのプロ独の強調はまた中国での「社会主義」の不可能性の表象であるか。浮遊する法的構成技術的構成と さまよ える農業問題を＜革 命＞する 基底は、＜生活過程＞の様式と意識内容の裡に浮上す るのでは ないのか。日 本革命の可能性 はここらあたりにある。という感処は根本的ではないのか。

（T・K）

スケジュール

▼5月12日ー三里塚東峰公判　午後1 時／千葉地裁

▼5月20日ー11・19控訴審（高橋克行）　午後1時半／東京高裁

▼5月20日ー第5回労闘講座　5時半／武蔵野公会堂

共産同理論機関誌 叛旗 ーB5版ー

■特別号 OCT.1975／同盟内論争の結果と展望 ——価700円
9・24同盟大会への諸文書／《きめられたこと》と《きめられないこと》／回帰への道か？それとも飛躍への道か？

■第10号 JUN.1975 ——価700円
政治表現の原理的措定と経験的総括／日本国家と遺制的共同幻想／転形期の思想水路

■第9号 JUN.1974 ——価400円
戦後革命運動の鞍部と拠点／生活圏の変容とかくめい

■第8号 FEB.1974 ——価600円
「国家ー民衆共同性」の歴史像／死すべき権力と共同性の行方／再びわれら過渡期の途上にて

■第7号 DEC.1972 ——価400円
時間と関係の弁証法／われら過渡期の途上にて

■5・13沖縄討論集会特集号 ——価300円
沖縄闘争と綱領問題／家族・親族・共同体・国家…吉本隆明

■6・3政治集会特集号 ——価300円
「世界ー民族」「国家ー市民社会」を超えるために／「世界ー民族ー国家」空間と沖縄…吉本隆明

各号とも残部僅少